いしかり博物誌 141

12万年前への階段

1/30、2/6開催の
「連続講座 石狩大学博物学部」では、
海岸段丘と地球の活動との関係や、
市内のほかの坂道の話などを紹介します。
（21ページをご覧ください）

国道231号を石狩から厚田へ北上していくと、聚富で突然、急な上り坂が現れます（図1）。

すぐ登りきりますが、ちょっと進んだら、またもう1回、上り坂が。標高で70～80mくらいまで登ったあとは、平坦な見晴らしの良い地形が広がります。

まるで1階から2階、3階に上がったかのような、こんな地形を「海岸段丘」といいます。望来や古潭など厚田区南部の海岸沿いや、旧石狩地域の高岡、当別町の南西部などで、このような段々の地形を見ることができます（図2）。

いったい、どのようにしてこの〝階段〟ができたのでしょうか。

聚富の1つ目の坂を見てみましょう。

道路の両側は、崖と言ってもいいくらいの急斜面です。道を外れ、その斜面をたどっていくと…望来の海岸に出ました。ここは、波が大地を削って形成された海食崖です（図3）。実は、聚富の坂道も、望来海岸から続く海食崖の延長なのです。

今から6千年前、温暖な気候のために海水面は約3m高いところにありました。そのため、聚富から当別まで低地には海が入り込み、丘のふもとが波で削られて、崖が形成されたのです。その後、海水面が現在の高さまで少し下がると、崖は内陸に取り残されました。それが聚富などで見られる急な坂道の原因です。

これで「1階から2階」への急坂ができた理由は分かりました。

では、「2階から3階」へは？

理由は同じ。さらに昔は、この1段登った高台の上に波打ち際があったのです。石狩や当別は大地の上下の動きが活発な地域で、現在でも地面が少しずつ上昇を続けています。その速度は平均して1年で0.5㎜程度。わずかなようですが、1万年だと約5m。過去にさかのぼれば、それだけ地面が今より低い位置にあったことになります。

「3階」へと上がる2つ目の坂は、「2階」がまだ海面下だったころ、波に削られてできた海岸の崖だったのです（図4）。火山灰などの証拠から、今から12万年前の波打ち際の崖だったことが分かっています。

さらに内陸には「4階」「5階」の段丘もありますが、浸食などのため今では見分けることが難しくなっています。

（志賀健司）

図1:聚富の坂道（国道231号）

図2:古潭の海岸段丘地形。1段目と2段目が見える

図3:望来海岸の海食崖

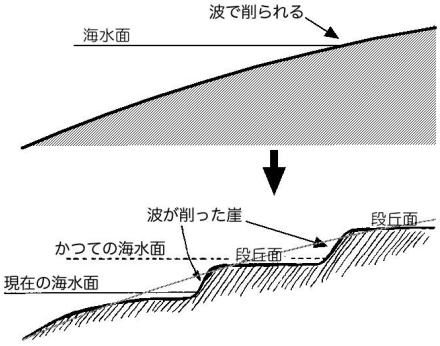

図4:海岸段丘のでき方。波打ち際で削られた崖が、長い年月の間に地面が上昇することによって高いところに移動する

石狩市学芸員
志賀健司　Kenji Shiga

専門は地質学・漂着物学・海辺学。地球の環境の変遷などを調べるとともに、石狩の浜辺にどんなものが漂着し、それがどんな意味を持っているかを研究している。

ERIS「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ（http://www.i-eris.tv/）でもご覧いただけます。